

鼎談

# 先人たちの足跡から学ぶ

現代のようにグローバル化が進む以前の、明治維新から第二次世界大戦に至るまでの間に、果敢にも日本を飛び出していった先人たちがいた。彼らは、日本を飛び出すことによって何を学び、

また、飛び出した先に何を残したのか。

そして、後人であるわれわれは、

彼らから何を学ぶことができるのか。

\*本文中の太字は、日本を飛び出した先人を表わしています。



ブラジル移民募集ポスター（1925～26年）。現在、海外で生活する移住者の子孫は250万人ともいわれている  
『日本ブラジル交流史』（社団法人日本ブラジル中央協会）より転載

かばやま こういち  
樺山紘一  
(国立西洋美術館長)

いまはし えいこ  
今橋映子  
(東京大学大学院総合文化研究科助教授)

よ も た いぬひこ  
司会 ● 四方田 犬彦  
(明治学院大学文学部教授)

四方田 今回の特集は「日本を飛び出した日本人の肖像」です。日

本は、周りが海に囲まれていて、島国だとか内気だとか、排他意識が強いとか、さんざんいわれているんですけども、それと同時に、江戸時代の吉田松陰のように、国禁を犯してでも外に出たいという意識を持った人もいたわけです。

それが明治以後、国の政策から外に出る人、自分から出ていく人、というふうが増えていって、知識人や芸術家、あるいは政治家といった人たちから、南米・ハワイ・旧満洲などへの移民であるとか、さまざまな人たちが日本を飛び出していきます。

また、安岡章太郎氏が『大世紀末サーカス』（朝日新聞社、1984年）のなかで書いているように、明治初期に芸人たちが巡業でヨーロッパやアメリカを回ったりしています。ほかの国に比べたら数は少ないのですが、石川三四郎（1876～1956）、野坂参三（1892～1993）、伊藤律（1913～89）といった政治亡命者という例もあります。そのほか、非常にユニークな例で、金子光晴（1895～1975）のように単なる放浪というのがあります。

飛び出した先で骨になる人もいたし、挫折して帰ってくる人、凱旋する人など、いろいろな例があるわけですけれども、その人たちについて考えてみようというのが今回の特集のテーマです。ただ、これはもう多岐にわたるので、とりあえず明治維新から第二次世界大戦ぐらいまでのところにしておこうというところで、樺山先生と一緒に人選して特集で11名をとりあげました。

樺山 ごく近年になって、年間1500万～1600万人ぐらいの日本人が外国に出かけるようになりました。そういうなかで、最近よく話題になるように、松井秀喜選手がヤンキースに行つて、ともかくも世界水準での野球ができるということがあらためて日本人に分かってきました。ましてさかのほれば、イチロ1、野茂英雄といった選手が活躍している。そこで日本人がはつと思つたのは、一つには日本の野球のレベルがあがったとい

う、そこそこの自信を持ったという一面があります。でも、それだけではなく、それまでのメジャーリーグになかった新しい種類の野球を導入したという点があって、むしろそのことのほうが大きい話題ではないかという気がしているんです。

野茂投手のトルネード投法には、バッターも、そして観客も驚いた。また、イチロー選手のように、ホームランを60本も70本も打つのではないで、バントでも内野ゴロでもヒットにしてしまうようなバッターは、これまでアメリカになかった独特のスタイルです。アメリカのファンも、彼らの全く新しいスタイルの野球に、たいへん鮮烈な印象を受けたと思うんです。

明治維新から第二次世界大戦に至るまでの間に、数多くの日本人が日本を飛び出した。それは、本人にとってもかなりリスクキーであったし、また周りに大きな波紋もたらした。しかし、それなりに、アメリカであれヨーロッパであれ、あるいはアジアであれ、そこに新しい価値、新しいスタイルを生み出したという面が必ずあると思うんです。われわれも、その行ないを見て、日本人にも新しい価値が構築可能だという意識を持つことができた。そういう面を大事にしたいと思っています。

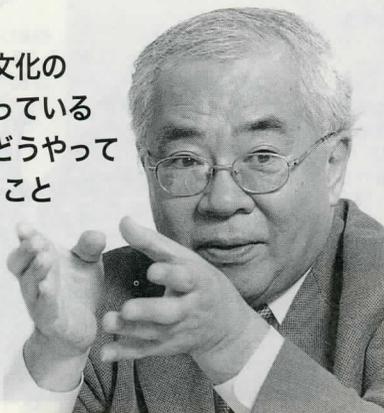
**四方田** 日本人が海外に何かを得るために行くこともあるけれども、それだけではなく、あちらが作り出したものに対するオルタナティブというか、別のモードを持ち込むことであちらを豊かにしていく、ということですね。

映画の世界でも、1910年代に早川雪洲(1886~1973)がハリウッドで活躍します。その当時の映画はサイレント映画ですから声が出ない。ですから、役者たちは非常に過剰な演技をしなければいけなかった。これに対して早川雪洲が、『チート』という作品のなかで自分の演技を全く殺す手法をとりまします。歌舞伎のだんまりから想を得て、あえて決定的な瞬間、メロドラマで緊張が走る瞬間に何もしないで、無表情にするということを初めてやったわけです。このために、ハリウッドの演

#### 樺山紘一

かばやま こういち ●国立西洋美術館長。西洋中世史、西洋文化史を専門分野とする。1941年東京都生まれ。1969年京大文学部人文科学研究助手、1976年京大文学部助教授、1990年同教授、1997年同文学部長を歴任し、2001年より現職。著書に『ルネサンスと地中海』『肖像画は歴史を語る』『世界を俯瞰する眼』ほか多数。共編に『ノストラダムスとルネサンス』等。

撮影 高木厚子



### 大事なのは、多様な文化のなかでもってできあがっている人類文化に、われわれがどうやって貢献できるかということ

技の手法が変わってしまうということが起きました。樺山先生がおっしゃった原理というのは、われわれが強く考えなければいけない視角・プロトタイプとして重要だと思っています。

**樺山** グローバリゼーションの時代に、日本人もようやく国際水準に達したと考えがちなんですよね。それでも間違っていないんだけれども、ただ、大事なのは、多様な文化のなかでもってできあがっている人類文化に、われわれがどうやって貢献できるかということであって、そういう貢献の形を初めて見つけたというふうな議論をしなければいけないと思うんです。だから、明治維新以降、いうならば世界が一体化していくなかで飛び出して行った日本人が、どこで独自の活動に参加できたかというふうに考えたい。このことが翻って、いまのグローバリゼーションのあり方というものもを考えるきっかけにもなるのではないだろうかというのが、今回の企画の趣旨だと思います。

#### 敗者の系譜

**今橋** 今回の企画を聞かせていただいて、なるほどと思ったことがあります。これまで、日本を飛び出した日本人の話をするときには、だいたい故郷に錦を飾るというパターンが多かったと思うんです。しかし、今回の企画をお聞きして、向こうに行つたきりかもしれないし、あるいは帰ってきて故郷に錦を飾れない人たちがたくさんいたことに気づき、彼らのことをあらためて考え直さなければいけないと思いました。

一つのパターンは、山口昌男さんの言う「敗者の系譜」だと思います。つまり、向こうに行つてそのまま朽ちてしまった人たちがいるわけです。「薩摩治郎八とパリの日本人画家たち」(徳

島県立近代美術館（1998年）という展覧会がありました。薩摩治郎八（1901〜76）は、敗者とはちょっと違います、いまなら200億とも600億ともいわれるお金をパリで使い果たした人です。この治郎八がパトロンになって開いた展覧会に出品した画家たちがたくさんいるんです。このなかには、いまやこの展覧会の図録にしか図版がないような、例えば戸田海笛（1887〜1931）や出島春光（生没年不詳）という画家がいます。この2人のように、フランス人の日本趣味みたいなものを逆手にとって、フランス人が気に入るような油絵を描いて、フランス人たちが「食い物」にして生き抜いた人間がいました。

先ほど、樺山先生がおっしゃった新しい貢献の形ということの歴史となるか、あるいは単にカウンター・ジャポニスムのなかに埋もれてしまった日本人というべきなのか、いろいろな評価の仕方ができると思うんですが、ただもう一度そういう形で考えてみると、彼らは敗者というべきなのか、それとも、いろいろな文化の価値体系のなかで生き延びるといふたくましさを持った人間というべきなのか、両方の視点があると思います。

一方、ある人間の事蹟が記録され、私たちのなかに映像として留まるといふことはまた別の問題なので、結局そういふふうに残らない人間たちを私たちは掘り起こすべきではないかと考えます。例えば、パリに行った画家たちというと、どうしても日本から直接パリに行った人たちを考えがちですが、ごく皮肉なことに、黒田清輝（1866〜1924）よりも、実は、清水登之（1887〜1945）のようにアメリカを経由してフランスに行った人たちのほうが、作品としては噛み応えのあるものを残しているんじゃないかという気がするんです。そういう意味では、放浪などして異なる文化のなかを歩いていった人間がパリに着いたときに見たものを、もう少しフィールドを広



薩摩治郎八（上）と治郎八が私財を投じて建てた日本館（現・パリ大学国際都市日本館）（左）

日本館パンフレットより転載

（右）1929年の「仏蘭西日本美術家協会パリ1回展」展示会場に集まった薩摩治郎八（左端）と、美術家たち（右から二人目が会長の藤田嗣治）。治郎八は、協会の創立者であった

所蔵 柳豊子氏  
協力 徳島県立近代美術館

げて考えるべきなんじゃないかと思えます。  
**四方田** アメリカとかイタリアの日本研究者と会うと、パリと東京がナルシズムの合わせ鏡だと言うんです。フランス人は、フランス人にしか江戸文化を理解できないと言う。東京のほうは東京のほうで、自分が名誉フランス人になったつもりで、韓国人やラオス人がいかにパリに憧れているかという問題は全然頭がない。お互いがお互いを褒め合っているだけという図式があるわけです。

でも、今橋さんのお話を聞いてみると、そういうものじゃない日本人のパリ体験というか、全世界を放浪した後に行くとか、あるいは敗者であったり、日本的なものを逆手にとって生き延びたりするといふ、非常に興味深い例があることが分かります。つまり、合わせ鏡で褒め合うような人間のほうが実は少数なのであって、もっと複雑なパリ体験というもの

を日本人は持っているということを感じました。  
**樺山** そうですね。これまでわれわれは、日本を飛び出した日本人の一面だけを考えてきました。主に留学生、もしくはそれに類するようなビジネス業務にかかわった人たちは、事前に自分はどうしようというポリシーを持って海外に行っただけです。だから、基本的にはパリに行く、あるいはベルリンに行くというターゲットが決まっています、そこで何をやるかある程度は想定している。夏目漱石（1867〜1916）がロンドンでやろうと考えていたことはだいたいそのとおりになった。こういうポリシーがはっきりとした留学体験というのが、近代日本にとって大きな意味があったことは間違いない。

ただ、実際には、はっきりとしたポリシーがなかった留学生がたくさん存在した。黒田清輝だって、初めはパリに法律を勉

強しに行っただけけれども、それが絵になっちゃった。それどころの話じゃなくて、パリにフランス語を勉強しに行っただけでもレストランのシェフになってしまった、というような例はいくつもあります。われわれがいままですくいあげてこなかったものをこまめに探し求めることによって、いままで見えてこなかったものが見えてくるんですね。

**今橋** そうですね。私は、柔道は全然知らないんですけども、特集のなかで前田光世(1878~1941)という柔道家に興味を持ちました。パリに行った柔道家のなかにも石黒敬七(1897~1974)というかなり不可思議な行動をした人がいますが、柔道家のなかには、世界に出ていくときに、柔道という道を広めに行くというのじゃなくて、いわば生きるための一つの方策として柔道を前面に出して世界を渡り歩くという人がいますね。その意味では、写真家は20世紀の冒険家だと私はつねづね思っています。普通で考えられる画家とか法律家とか政治家とか、あるいは学者などの職業以外に、世界を渡り歩ける人々がいたんだと実感しました。

**樺山** 前田光世は、要するに格闘家なんです。本人は、もちろん柔道を広めに行くという意識であつただろうけれども、実際に柔道のミッションをやりますといつたって、いまはともかくとして、昔はそんなに人が集まるわけではないので、まずは異種格闘技戦をやった。いまでいうK1などと同じことを100年ほど前にやったわけです。いままでだれも知らなかったけれども、柔道という格闘技があつて、この柔道には、単に格闘技というだけではなくて、柔道という道を含んだ独特の精神性まであるんだということを、ミッションとして語つたんですね。そのことが、いわゆるオリエンタリズムを含めて、日本に対する関心を呼び起こすことにつながつたと思います。



出島春光「鴉飼図」(1935年、ベルギー、個人蔵)。出島は、フランス人が好む日本的な作品を多く残した「金子光晴 旅の形象」(平凡社、1997年)より転載

先人たちの足跡から学ぶ

**四方田** 柔道家というのは、ある種の普遍性を持った身体言語という言語で語りますね。僕は、ポロニーヤに留学していたころ、世界入れ墨選手権の通訳をやつたことがあるんですが、日本の彫師がイタリアとかベルギーの彫師と話をするわけです。お互いに言葉は全然通じなくても、漢字を書いたりとか、龍の絵を描いたりして、どうやって彫るんだという話をするとき意気投合します。言葉ではなくてプロ同士の話なんです。格闘技のときにも同じことがあると思います。越境というのはこういうことなんじゃないかな。

**樺山** 昭和天皇の主厨長だった秋山徳蔵(1888~1974)という人も面白い人です。それこそ最終的には大きな錦を飾つた人ですけども、この人は、いわゆる丁稚修業をフランスでやりました。しかし、フランス語はほとんど何もしゃべれなかつたんです。ただ、例えば、卵を攪拌したりすると彼のほうがはるかに速いとか、卵を割るのだからフランス人がやると殻なんかを落つことしちゃうらしいんです(笑)。彼は、その辺から、つまり、だれもが手作業、手の巧緻性だけでもって自分の仕事をやっていくところにまず溶け込んだわけです。こういう活動というのは、ほとんどが記録に残らなかったものだから、私たちも想像でしか語れないけれども、秋山さんのような人たちの記録なり、あるいは記憶なりをさかのぼると、いま四方田さんがおっしゃつたような側面がよく見えてくると思いますね。

**今橋** 柳原和子さんの『在外』日本人「晶文社、1994年」のなかには、戦後のことになりましたが、ものすごく感動的なエピソードがたくさんあつて、海外にいる日本人、例えば商社の方なんかの話がいふん入つていふんです。なかなかこういう資料は残りづらいのですが、こういう証言に、野茂投手やイチロー選手活躍と同じくらい、若い人たちを外に誘う力があるんだらうと思います。やつぱり、商社の方なんかは一番生なかたちで異文化体験をしているわけで、日本的な規範と現地の規範と

の軌轍を最も強烈に体験しているのが現代の企業人でしょう。そういう人たちの生の体験が聞ければ、それはそれでとても貴重です。現在進行形の「日本を飛び出した日本人」の一つのあり方だろうと思うんです。

## 日本的なるものにどこで向き合うか

**四方田** われわれは、日本で無自覚的に住んでいるときは、ナショナリズムとか、あるいは日本的なものとか、そういうものをほとんど考えずに住んでいられるわけです。気分的にはコスモポリタンの感じでいられる。僕もそうで、日本にいるときには冷や奴にお酒なんて全然関心がないのに、それがない環境に行くときに急に日本酒が飲みたいと思ったりして、海外に行くことによって初めて日本的なものに向き合うことになりました。

これに関連して、2002年にデリーの中国研究所で開かれた「岡倉天心、アジアは一つ」発言100周年記念シンポジウム」のなかで、だれかが、岡倉天心(1862~1913)が「アジアは一つ」という発言を英語で行なった意味を考える必要があると言っていました。これは本来であるならば、「アジアは一つ」と言うんだったら、例えばベンガル語とか、あるいは日本語で話すのが筋なんじゃないか。天心はボストンに行って、ボストンからカルカッタに行って、そこである意味でのエグザイル(流浪・国外生活者)としてしゃべるわけですね。エグザイルとして彼は日本に向き合う。それで、日本のことを英語で書き続ける。孫文やガンジーの例を待つまでもなく、エグザイルであるというところが、近代においては、ナショナリズムとか、自分の出自に向かい合うある種になるんじゃないか。

そして、その後どういうふうに進むかというときに、パリを食い物にした日本人という例もあるし、それからそういうことは絶対嫌だといって、日本的なものを最後まで回避する荒川修作(1936~)みたいな画家もいたりする。ですから、日本的

## エグザイルであるということが、 近代においては、ナショナリズムとか、 自分の出自に向かい合う ある種の条件になるんじゃないか



四方田 犬彦

よもた いぬひこ ●明治学院大学教授、映画史家。1953年兵庫県生まれ。東京大学文学部卒、同大学院(比較文化)修了。ソウルの建国大学校客員教授を経て、現職。映画批評、比較文化などの批評活動を行なう。コロンビア大学、ポロニヤ大学で客員研究員を務める。1993年『月島物語』で斎藤緑雨賞、2000年『モロッコ流調』で講談社エッセイ賞等受賞。

撮影 高木厚子

なものにどこで向き合うかということは、いろいろなパターンを考えてみなければいけない。

**樺山** エグザイルにおけるナショナリズムの問題について、亡命もしくは逃亡という主題は、日本から出て行った人間を論ずるときに、実は非常に重要な問題なんだけれども、日本の場合、地政学上の理由があつて、ヨーロッパあるいはユーラシア大陸全体と比較しても極めて少ない。実は亡命っていくらでもあったんじゃないかと思うけれども、言葉の本来の意味での亡命は、やっぱり20世紀の現象なんです。ただ、さかのほれば馬場辰猪(1850~88)から始まって石川三四郎などの例があります。が、岡田嘉子(1902~92)を亡命とするか逃亡とするかは難しいところがありますね。

**四方田** 本人は愛の逃避行と言っています。(笑)

**樺山** 岡田嘉子はさておき、政治的な意味での逃亡・亡命を考えた場合、1930年代のユダヤ人のアメリカへの逃亡・亡命などは、ユダヤ人世界だけではなくて、亡命を受けた入れたアメリカ側にとっても大きな意味を持っています。その時代を考えてみると、日本だって数は少ないかもしれないが、質的には同じものを持っているんじゃないかという気がするんです。

**四方田** だから、そこをどう見るかなんですよ。要するに、どうして日本の知識人は軍国主義下において亡命しなかったのかという問題として見ていくか、いや実は目立たないけれども何人かいたのでその独自性を見ていこうというのと、両方の見方があると思うんです。

石川三四郎が亡命者といえるかどうかは微妙ですが、彼は、大逆事件(1910年)のときにたまたま牢獄にいたから有罪判決を免れ、その後、ビザもパスポートも持たずにベルギーに行きます。



**四方田** これはむしろ心理学で考えたほうがいいかもしれないね。日本だけで自己完結していた社会が、急に明治になって視野が開けたときに、自分が世界のどこに在るかという地政学的なアイデンティティーが揺らいじゃう。そこで超越的なものを求めて海外の神学校に行く。ところが、そこでも争いを起こして帰ってきて、また世界の中心が分からなくなっちゃう。そこで偽史のメンタリティーに訴えるんじゃないかと思うんです。

**榊山** 旧制盛岡中学出身の新渡戸稲造(1862~1933)のよう、よくいえば世界を視野に収めた人間、悪くいえば誇大妄想になった人も含めて、どこか世界と自分との距離を埋めようと試みる人が、東北から結構出ます。

宮沢賢治は外国へ行かなかったけれども、しかし彼の作品を読んでいると、どこか日本を超えた世界を持っているでしょう。彼は、非常に早くから当時のヨーロッパのクラシック・レコードを聴いていたんです。新しく見え始めた外の世界と内面との絶望的な距離を何らかの形で埋めようとしたと思います。埋め方にはいろいろあって、芸術で埋めようとか、あるいは学問で埋めようというものもあります。例えば、秋田からは内藤湖南(1866~1934)をはじめとたくさん漢学者が出ています。彼らにとつて、秋田県で勉強したことと中国で勉強したことにかんがりの距離があつた。これを漢学の素養でもって埋めようとしたわけです。これも、急に世界が見え始めた明治20年代くらいからの極めて特異な現象だったのかもしれない。

## 北京とパリとニューヨーク

**四方田** 1910~20年代の北京に、青雲の志を持った人間がずいぶん行くんですが、留学生の一人に、日本の映画界の最も重要な人物である川喜多長政(1903~81)という人がいます。彼は、北京、それからベルリンに留学して、その後、日本に洋画を輸入するということをやります。彼は、戦時中に上海

国吉康雄制作の「夢」(1922年、油彩)。アメリカ画壇で活躍した国吉の作品には、日本人のアイデンティティーはあまり感じられない  
所蔵 石橋財団ブリヂストン美術館



で映画会社を作って李香蘭(1920~)の育ての親の一人になる。こういう人間をどういうふうにかけるかというと、これはもう東アジア史全体の枠組みで考えないといけない。それからもう一人、甘粕正彦(1891~1945)という人がいます。彼は大杉栄(1885~1923)を殺したという理由で日本にいられなくなるわけですが、僕は、彼自身は無実だと考えています。ただ、日本にいられなくなつて満洲に渡つたことは事実です。一方、満洲にはいろいろな人たちが行くんですが、

普通は満洲を足掛かりにして日本に帰つて出世をしようと思つていたわけですが、だから、別に中国語も覚えないうし、中国人を馬鹿にしていました。ところが僕が、長春の満映跡地で、もう70歳、80歳になつた当時の俳優たちにインタビューしてみると、「甘粕さんだけは違つた」と答えるんですね。甘粕は言葉も覚えようとした。それはなぜかというのを考えてみると、やっぱり、彼はもう帰るところがなくなつて、満洲の土になろうとしたということなんです。ほかの人たちは、いざれ帰るというための足掛かりにすぎない。両者はやっぱり大きく違います。

**榊山** こういうケースを併せて考えたら面白いと思うんだけど、中江兆民(1847~1901)の息子に中江丑吉(1889~1942)という人がいます。この人は、第一次世界大戦中に北京に行つて、その後約30年間ずっと北京で過ごしたんです。本人は北京大学

に入ったわけでもないのですが、しかし街中の中国人たちとごく普通に付き合います。だから、当然中国語がうまくなるし、特に中国の知識人たちとの人脈ができあがる。そういう1910年代独特の中国の知的世界というものがあって、中江丑吉だけじゃなくって、当時日本から行った多くの留学生が北京で接触するんです。こういう人たちの流れが、結局、日本の中国に関する認識を確実に豊かにしていったという側面があります。

**四方田** 日本人が当時の北京に行ったときに、世界の中心にたどり着いたという意識はあったのでしょうか。  
**樺山** 1910年代には、あったにしても稀薄だったと思いますね。中江丑吉のケースについていえば、北京にいても、そこが世界の中心だという肩の張った緊張感はないですね。むしろ、自分は漢学を勉強しにきている、あるいは父親だつてフランスに行つて世界を見てきている、同じことを北京でやってみよう、という比較的肩の力を抜いた入り方だったと思うんですが、結果として長引いたんですね。

**四方田** それでは、1930年代まで、勝ち組も負け組も含めて日本人がパリに行くというのは、やはりパリが世界の中心という感じがあったからでしょうか。

**今橋** 明らかにそうだと思います。ただ、ジュリア・アクリステイヴァが『外国人 我々の内なるもの』(法政大学出版局、1990年)という本のなかで書いていますが、あれだけフランス社会に知的に組み込まれている、あるいは外から見ると牽引していると思われる人でさえ、私は外国人なんだということを表明せざるを得ないというところに、パリという文化の性格を考えさせられますね。

フランス社会とかフランスの文化的な、少な



### 日本を飛び出した有名無名の 先人の姿を語ることで、 いろいろな意味でぼやけている、 いわゆる日本人というものの境界を 自然に見ることができる

#### 今橋映子

いまはし えいこ ●東京大学大学院総合文化研究科助教授。1961年東京都生まれ。学習院大学文学部卒、東京大学大学院総合文化研究科博士課程修了。1984～1990年パリ第四大学大学院に学び、DEA取得。日本学術振興会特別研究員、筑波大学文芸言語学専任講師を経て現職。1994年渋沢クワンテール特別賞、サントリー学芸賞受賞。著書に『異都憧憬——日本人のパリ』『金子光晴 旅の形象——アジア・ヨーロッパ放浪の画集』等。

撮影 高木厚子

先人たちの  
足跡から学ぶ

くとも知的な階級のことに関していえば、そういうなかに組み込まれたと思っても、結局、フランス側からは、あなたは何人ですかという民族的なカラーを出すことを無意識的に要請される。インターナショナルスタイルなんだけれども、同時にナショナルスタイルを持たないといけない。常に、あなたは異なる者なんだ、というアイデンティティーの刻印を押されるわけです。

**樺山** ニューヨークに行つた国吉康雄(1889～1953)の場合、彼自身はもちろん自ら日本人であることを意識してはいるけれども、しかし、日本人のアイデンティティーを表現しようということは、外からも求められないし、自分も求めていないんです。むしろ、国吉の作品を見てみると、あれは1920～30年代のニューヨークそのままだと思います。彼が岡山県出身であるとか、日本をどういう事情で飛び出したかということについては調べれば分かるんだけど、しかしあまり重要な情報ではないという感じがするんです。おそらく国吉だけではなくて、1910年代もしくは20年代以降ニューYorkに行つたヨーロッパ人の画家たちは皆そうですね。ニューYorkの現在がまぶしいんです。ニューYorkの場合、どうやってできあがつてきたとか、自分がどういうアイデンティティーでここに來ているかということとは問われなくて済むというのが、パリのケースと非常に違うと思います。

#### ◎ 評伝を書くということ

**今橋** フランス人たちを逆手にとつた出島春光の場合、日本人のアイデンティティーを自ら探求しているということではないし、外に飛び出て自分は何者だと探求せざるを得ないというような経緯もたどっていません。パリの研究をしているときにいつも思うんですけれども、黒田清輝とか永井荷風(1879～1959)については語りやすいけれども、出島については語りづら

からないし、その語ることに何の意味があるのかも分からない。語ることで、語りのレベルとかカテゴリーとかが違ってしまっただけじゃないかという恐れや、あるいはそういうことを語ることに自体の妥当性という問題にぶつかります。

だから、例えば藤田嗣治(1886~1968)のことを考えても、藤田をどう語るのか、だれがいつ語るのかというのはいくらも大事な問題で、戦争中の彼の言動にしても一つの日本帰帰とは言い切れません。2回の大戦時におけるフランスのナショナリズムと、藤田のナショナリズムを交差させないといけないような問題を、だれがどんなふうに書くのか。

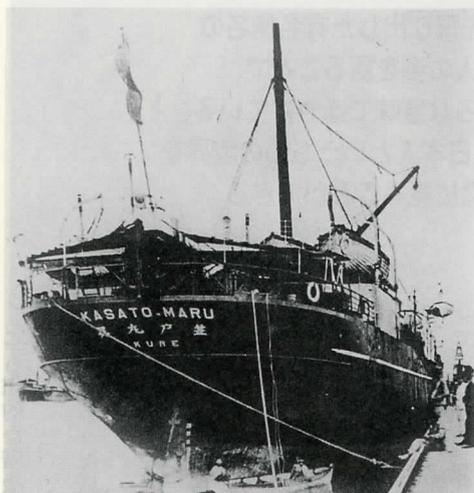
書き手のさまざまな心理的抑圧とか、あるいはわけが分からなくなってしまうような人たちについて語ることの困難さが、日本を飛び出した日本人たちの記録をすごく単一化していたし、単調化していた。それをいまだどんなふうに書くのかという時期にきていると思います。

**榊山** そうかも知れませんがね。藤田のようなケースでさえ、なぜ戦争に対してあんなスタンスをとったのか、日本との距離をどうとったのかということが分かっていないのですから、もっと問題は深く難しいんだらうと思います。

ましてや、国吉康雄にとつて日本とは何であったかということとは、あまりメモも残っていないので問題が複雑なんですけれども、そこまで踏み込まないと日本を飛び出した日本人が日本に対して何を構想したかとか、それがわれわれにとってどういう意味を持つかということについての本格的な理解にならないだらうという気がしますね。

**今橋** そうですね。だいたいそういうのを書くときに、ご本人が書いた記録というのはすごく大事になるわけですけども、藤田に限って言えば、それがあつた程度の信憑性が置けるようなものではない。そういうところが余計に彼を語ることを難しくしていると思います。

ブラジルへの第1回移民船「笠戸丸」。ブラジルへの移民は、1908年に始まった。笠戸丸に乗船した移民781人のうち、約半数に当たる325人は沖縄からの移民であった【日本ブラジル交流史】(社団法人日本ブラジル中央協会)より転載



**四方田** おそらく金子光晴だつて本当のことを書いていないことがありますね。自伝というのは第1次資料ですけども、やっぱり括弧書きで、メタレベルで見なきゃいけない。

われわれがこういうふうに見ていくことで、これまで学問の範囲として、これは歴史学だ、こちらは美術史だ、あれは心理学だというふうに分けていた範疇に当てはまらないような人間がどんどん出てくるということですね。だから、いろいろな人間を見いだすことは、われわれ見る側の範疇を組み替えるためにも必要なことだと思ふんです。

**今橋** おそらくそのときに、評伝という語りのジャンルには、さらに新しいものを盛り込めるんじゃないかと思ひます。評伝の書き方によつて、その人間の全体像を語るといふことができるようになる。そういう意味で、知っている人、知らない人、いろいろなものを語り直せる。伝記というよりも評伝と呼んだけれうがいいと思ひますけれども、そういう形でたくさんの人を掘り起こしたら面白いと考えています。

**榊山** 例えば、沖縄からの移民の人たちのなかに、実はいまこういうところでもつてとりあげなきゃならぬような人たちがたくさんいるに違いないんです。しかも沖縄の場合には、当時沖縄が置かれていた地位の問題と、それからほかの入植者との間の関係が複雑だということがある。例えば、ブラジル、あるいは、ペルー、ポリビアで沖縄入植地というのが日本社会のなかでも何か特別な位置を占めるという問題を考えなくてはならない。そういうことを含めると、とりわけ沖縄の移民、あるいはその移民の人たちと残留した沖縄社会との関係というようなことを、まだまだ議論しなきゃいけない。

実は、移民の人たちが本国へ錦を飾るとか、あるいは逆に、日本人を呼び寄せる、本国に送金するといったケースは極めて少ないんです。これは、やっぱり移民政策全体に問題があつて、アメリカでもブラジルでも、行った人たちに対して政策的にも社会的にも十分なサポートができなかったということが原因だと思ひます。

**四方田** 移民との関係では、今度は海外で生まれた子どもたちが日本をどう思うかという問題があります。3人だけ例を挙げます。

一つは、李香蘭、つまり山口淑子です。彼女の場合、お父さんが何をやってたかよく分からない人なんです。北京で語学学校を出ておきながら、はつきり何をやってたのかが分からない。こういう人のなかから、李香蘭が出てくる。その李香蘭という人の日本観も面白い。彼女は30年以上も、パレスチナ解放闘争に非常にシンパシーを持って活動しています。それから、従軍慰安婦問題についてもずっと取り組んでいるということを含めて、李香蘭という人を作ってきたものは何なのかを考えたい。

2番目は、梶山季之(1930~75)です。梶山季之という人は、ハワイ移民のお母さんと朝鮮総督府の役人であるお父さんの子どもとして京城(現・ソウル)に生まれます。彼は初期に、京城での青春物や創氏改名についての小説などを書いていきます。韓国でそれがほとんど映画化されて、梶山季之は、韓国では、三島、大江と同じくらいに偉く扱われるわけです。こういう梶山という人間の文学観・世界観というものは、やっぱり前の世代があつてこそ日本を冷静に分析できたと思えるんです。

3番目は、アルベルト・フジモリ(元ペルー共和国大統領(1978~82))です。彼は本当に一番貧しい日系移民の出身です。僕は彼の政策・モラルに対してはかなり批判的ですけども、それ



韓国映画『族譜』(貨泉公社)の1シーン。創氏改名を題材とした梶山季之の原作が韓国で映画化され、1978年の大鐘賞(韓国アカデミー賞)のうち、優秀作品賞、監督賞、主演男優賞を獲得した『1978年度版韓国映画年鑑』(韓国・映画振興公社)より転載

とは別に彼の出自を考えると、彼はペルーのなかで低所得者層の人たちに支持されています。そういう意味では二・二六事件の将校みたいところがあるんですね。彼のことを、だれかがきちんとした評伝に書くべきだと思う。例えば、ペルーで天皇誕生日の日に日本大使館で祝賀会を催していましたが、その際に出された料理は、一般に想像される日本料理ではなくて沖縄料理なんですよね。そういうことをわれわれは考えなきゃいけないんじゃないかと思ひます。

**榊山** いまの問題に関連して、教育現場には、いわゆる帰国子女というのが増えています。しかも、そのなかには外国生まれの日本人がかなりいるんですね。外国生まれの日本来訪者というか、日本帰国者の問題というのは、今後、日本の文化を考えるうえでかなり重要な問題性を持っているという感じがします。

**今橋** これを考えることは、ナシヨナリズムの境界をもう一度考え直すことになると思ひます。あるいは、「日本人の境界」という問題ですね。それがどこにあるのかということが、近年盛んにさまざまな脱構築的な研究のなかで考えられてきたと思うんです。けれども、そうした理論的考察でなくとも、日本を飛び出した有名無名の先人の姿を語ることで、いろいろな意味ではやけている、いわゆる日本人というものの境界を自然に見ることができるといふことが、今日のお話を通じての一番の成果だといふふうに思ひます。

いままで光が当てられてこなかった人物に光を当て直し、また、その評伝を書くことによつて、さまざまな虚偽を乗り越えて、いやおうなく日本人というものの、あるいは「日本人」というものが存在するののかということ自体を再考できるのではないかと思ひます。なおかつ、こういうさまざまな日本人の肖像こそ、若い人にぜひ見せたいと感じました。野茂やイチローにはるか先に先立つ彼らの、意外なまでのしなやかさやたくましさ、私たちももう一度立ち戻りたいですね。◆

## 編／集／後／記

●今号では、前号で特集した戦後日本の来訪者たちの逆の視点ともいえる、日本を飛び出した日本人たちを特集しました。現在のようにグローバルゼーションが進む以前に、未知の世界に飛び出していった人たちの意識とはどのようなものだったのでしょうか。

私たちは、「海外」という言葉に少なからず魅力を感じています。しかし、先人の足跡をたどると、日本を飛び出して成功した人、故郷に錦を飾った人もいれば、海外でそのまま亡くなってしまった人や失敗して帰ってきた人もいます。ただ、今回の特集でとりあげた人々は、その成功の有無にかかわらず、かの地に何らかの貢献をした人々です。彼らの足跡をたどることが、いまま海外で生活する人々の励みになることを願っています。

私は、この特集を組むことよって初めてその名を知った人もいました。しかし、有名無名にかかわらず、そこにはさまざまな人生があり、思いもよらないドラマがありました。彼らはなぜ日本を飛び出さねばならなかったのでしょうか。その答えを考えることが、日本の社会を再考するきっかけになるような気がしてなりません。そして、海外に足跡を残した日本人に加えて、日本に影響を与えた来訪者を知ること、私たちの社会だけでなく、グローバルゼーションのあり方をも考えることができるのではないのでしょうか。

●2002年10月に設立30周年を迎えた国際交流基金も、2003年10月をもって独立行政法人化することとなりました。独立行政法人化後の第1号が奇しくも「国際交流」101号となり、新たな出発点に立ったという気持ちです。これからも、読者の皆様のお役に立てるような誌面づくりを心がけてゆきたいと思えます。

(山)

訂正とお詫び 「国際交流」第100号10頁本文中のラビンドラナート・タゴールの表記が太字になっておりませんが、タゴールは来日歴がありますので、太字の誤りでした。訂正して、お詫び申し上げます。

## 次号予告

特集 ◆

探検・発掘の世紀から  
保護・保存の世紀へ (仮題)

監修者 前田耕作 (和光大学名誉教授)

19・20世紀に盛んに行なわれた探検・発掘の業績を振り返り、探検・発掘がもたらした光と影の部分をとりあげて、21世紀をこれらの成果を国際的に保護・保存してゆく世紀として捉え、文化遺産保護に関する今後の課題を浮き彫りにします。

## [独立行政法人国際交流基金賛助会のご案内]

国際交流基金では、広く民間からのご協力を得て事業の充実をはかるため、毎年一定額のご寄付をお願いする賛助会の制度を設けております。会員の方々には、レセプションへのご招待、本誌を含む定期刊行物の送付等の特典を用意させていただきますので、この機会にご入会いただき、国際交流基金の事業拡充をご支援くださいようお願い申し上げます。なお、国際交流基金は税法上の「公益の増進に著しく寄与する法人」に指定されておりますので、ご寄付に関しては免税措置を受けられます。

年会費：個人一口 2万円 団体一口 10万円

※但し、5口以上お申し込みいただいた場合には特別賛助会員とさせていただきます。

お問い合わせ：独立行政法人国際交流基金 経理部資金課  
TEL 03-5562-3519 FAX 03-5562-3496

## [独立行政法人国際交流基金ホームページ アドレスのご案内]

アクセスをお待ちしております。

<http://www.jpff.go.jp/>

本誌に対するご意見・ご要望は、以下のアドレスまでお寄せください。

[mediakk@jpff.go.jp](mailto:mediakk@jpff.go.jp)

## 本誌編集委員

猪木武徳  
粕谷一希  
片倉もとこ  
樺山紘一  
濱下武志

## 国際交流 第101号

2003年10月1日 発行

定価 600円 (本体571円)

送料 210円

編集・発行 独立行政法人国際交流基金  
東京都港区赤坂1丁目12番32号  
アーク森ビル20・21階  
郵便番号 107-6021  
電話 03-5562-3532

発売元 第一法規株式会社

## 【本誌購読ご希望の方へ】

\*本誌の定期購読をご希望の方は、最寄りの書店または第一法規株式会社にお申し込みください。

\*ファックスによるお申し込みの場合は、左の用紙をご利用ください。

\*第一法規株式会社との連絡先は次のとおりです。  
東京都港区南青山2丁目11番17号  
郵便番号 107-8560  
電話 03-3404-2251 (代表)

\*本誌に対するアンケート(左の用紙裏面)にご協力ください。

©2003 独立行政法人国際交流基金

(本誌記事の無断転載・放送を禁じます。)

\*本誌は再生紙を使用しております。

# ● 国 ● 際 ● 交 ● 流 ● 2003 101



## 特集 日本を飛び出した 日本人の肖像

監修 四方田犬彦

- 巻頭鼎談 樺山紘一 × 今橋映子 × 四方田犬彦  
草森紳一 / 若桑みどり / 樺山紘一 / 神山典士  
宮尾大輔 / 石月麻由子 / 土方明司 / 酒井 摂  
川成 洋 / 渡辺直紀 / 四方田犬彦